

巻頭言

信州大学附属図書館長
笹本 正治

昨年刊行した『信州大学附属図書館研究』に続いて、順調に第二号をお届けすることができることは、附属図書館長として望外の喜びである。

本号も内容的には創刊号に引き続き石井鶴三特集号となった。信州大学に寄贈された石井鶴三資料約三万点については、じっくりとではあるが、着実に整理研究が進んでいる。文学や挿絵などの側面からの研究については、本号に多くの成果が掲載されているように人文学部の松本和也准教授の尽力により、他大学などの研究者と共同研究がなされ、成果が上がっている。なお、『信州大学附属図書館研究』は本学教職員だけに執筆を限るのではなく、本学の資料を活用しての研究については、積極的に発表できる場としてあり続けたい。

また、石井鶴三の画家としての側面については、人文学部の金井直准教授に油彩について執筆していただいた。

石井鶴三について美術館ではなく大学が主体になって研究を進めることは、社会全体の中に個人をいかに位置づけるかという、広い視野を提供できる利点があると考えます。その意味で教育学部の小野文子准教授による石井鶴三のもとにあった名刺の報告は、今後の研究にあたって大きな素材になる。様々な形でこの報告が利用されることを期待する。

本学が誇るコレクションに、山岳関係の本を中心に集めた小谷コレクションがある。附属図書館としては明治以前の文献について「近世日本山岳関係データベース」として、ウェブ上で広く社会に提供している。しかしその認知度、これを使つての研究はまだまだの感がある。そうした中で、本学人文学部卒業生の船田亜美氏により『富士の人穴草子』について紹介と翻刻をしていただいた。これは昨年度提出された卒業論文を前提にしている。このように様々な機会に学生たちによって小谷コレクションが利用され、教育・研究の素材になることを願う。

当然のことながら大学において最も重要なのは教育である。附属図書館もその一翼を担っている。高等教育センターの加藤善子准教授と附属図書館の小島浩子主査によるレポート作成支援の報告から、そうした動きの一端を知っていただけるだろう。

信州大学は分散キャンパスが特徴で、図書館も六つの建物から成っており、それぞれの歴史と特徴ある図書・資料を有している。そうした中で、本号には鈴木史子主査が繊維学部資料館の紹介をした。機会があったら、是非実際にお出かけいただきたい。

附属図書館はグローバルな展開にも心がけており、韓国の慶尚大学附属図書館と人事交流を行っている。最後にその状況について報告を設けた。

このように、本号にも多くの研究と教育、そして図書館の現状などが豊かに盛り込まれている。私たち附属図書館は館長以下一丸となって少しでも学生・教職員などが気持ちよく学べる環境を用意し、研究成果が上がるように支援し、その成果を広く社会に発信していくように心がけている。引き続き皆様のご支援とご協力をお願いしたい。

平成 25 年 1 月